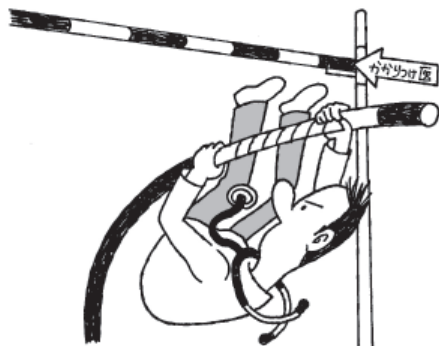


日本医師会では、かかりつけ医を「なんでも相談出来る上、最新の医療情報を熟知して、必要な時には専門医、専門医療機関を紹介でき、身近で頼りになる地域医療、保健、福祉を担う総合的な能力を有する医師」と定義している。あらためて自分に引き当てて考えてみる。まず「なんでも相談出来る」というが、相談くらいなら応じられそうだ。でも「最新の医療情報を熟知」って、結構ハードルが高いのではないかな。➤



こりゃ勉強が必要だ。他科の最新医療情報なんて聞きかじっている程度で、熟知というレベルにはほど遠い気がする。「必要な時には専門医、専門医療機関を紹介でき」ということに関しては、医師会等で繋がりを持っていれば何とかできそうにも思える。「身近で頼りになる地域医療、保健、福祉を担う総合的な能力を有する医師」でありたいと思うけれど、どれだけ能力があるのか自信はない。結局筆者自身は日本医

医界サロン

かかりつけ医とは

広報委員会 副委員長 川崎 康寛

師会が定義するかかりつけ医のレベルに達しているのか。

かかりつけ医という言葉の捉え方は医師の中でも一定ではないようだが、患者側の立場ではさらに違うようだ。以前に勤務していた病院での話である。発熱した乳児の母親より時間外に診て欲しいと電話があり、その病院にかかりつけだということで、受診されることになった。しかし、カルテを探しても見当たらない。来院されて確認するとその病院を受診するのは初めてだとのこと。事務員は「時間外に見てもらおうと思って、かかりつけだと嘘をついたのではないかな」と言うが、よくよく話を聞いてみると母親は「まだ生まれてからどこの医療機関にかかったこともなかったが、風邪をひいたらこの病院にかかろうと考えていたし、またこれからこの病院で予防接種や

健診も進めていくつもりであった。だから、今までかかったことが無くても、この子のかかりつけはこの病院と決めていた」と言うのである。そんな考え方もあるのだと感心した。科別に耳鼻科はここ、眼科はここというようにかかりつけ医を複数挙げられたり、さらには小児科のなかでも風邪を引いたらここだけれど予防接種だけはここというように、細分化したかかりつけ医を持っていたりする方もある。本当に様々だ。

かかりつけ医を定義するのは難しい。まあ、「頼りない医者だ」と思われないうちに講演会を聞きかじったり、医師会活動に参加したり、それがかかりつけ医と呼んでもらえる一歩なのだくらいに考えて日々精進することにしよう。